# フランス国立図書館

佐々木　優

昨年、フランス国立図書館（フランソワ・ミッテラン図書館）を見学しました。メトロ14号線ビブリオテーク駅で下車し、トルビアック橋方向にRER　C線の跨線橋を渡ったところに、4棟のガラスのタワーが、本を開いて向かい合わせに配置したようにそびえていました。そこは都市再開発地区の一画であり、かつては国鉄の貨物操作場があったところだそうです。図書館の利用者はそのタワーを横に見ながら進み、東西2箇所ある入り口からエスカレーターで下って入館します。

フランス国立図書館はドミニーク・ペローの設計です。中央の広い内庭に面して回廊がある建物が閲覧スペースであり、四隅にある18階建てのガラスのタワーは書庫と事務室になっているそうです。閲覧スペースは2層になっており、上層階が「オ・ド・ジャルダン（庭の上）」という一般利用者用閲覧室、下層階が「レ・ド・ジャルダン（庭の階）」という研究者用閲覧室です。フランス国立図書館の役割は、ミッテラン大統領の考えに基づき、「1、すべての人の利用に供する。2、すべての分野の知識を提供する。3、最新の情報通信技術を使用する。4、遠隔地からの利用、他の図書館との協力を可能にする。」ことにあるそうです（堂前幸子著「フランス国立図書館の将来」『国立国会図書館月報』367号（1991年）p.3）。旧国立図書館の利用対象が研究者のみに厳しく制限されていたことを思うとサービス方針の大転換であり、ヨーロッパの代表的な国立図書館である英国図書館と比べても一般市民に開放された大規模公共図書館としての特徴をもっています。

私は市民に紛れて、オ・ド・ジャルダンに入りました。利用申請などの手続きはありませんが有料でした。1日券は5ユーロー、1年間券は50ユーローです。逞しいガードマンの立っている自動改札口を通り、明るい内庭に面した回廊を巡りました。オ・ド・ジャルダンには、文学芸術関係、哲学社会科学関係など主題別にA室からJ室までの開架閲覧室が配置されています。私は北側のE室からH室までの文学芸術関係の閲覧室に入りました。そこには約12万冊の図書と750タイトルの雑誌が開架されており、自由に手に取ってみることができます。ペーパーバックの本にフランス装という言葉がありますが、フランス国立図書館の開架本は、ペーパーバックは全てハードカバーに製本されていました。背文字にはタイトルと請求記号の箔押しがあり、表紙のクロスの色が電球の光に反射してとてもきれいでした。閲覧室内は蛍光灯ではなく電球の柔らかな光であり、木製の書架や閲覧座席が落ち着いた雰囲気を生み出していました。

利用者は学生らしい若い人が多くいました。また、国際都市のパリらしくいろいろな人種の人がおり、日本人らしい東洋人もたくさん見かけました。